

AO/TORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

ルパン対ホームズ

モーリス＝ルブラン

保篠龍緒／訳 依光 隆／絵





講談社 青い鳥文庫 67-1

ルパン^{たい}対ホームズ

モーリス = ルブラン

保篠龍緒 訳

1983年9月10日 第1刷発行

1999年7月29日 第48刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話 出版部 (03)5395-3536

販売部 (03)5395-3625

製作部 (03)5395-3615

N.D.C. 933 230 p 18cm

装 丁 久住和代

印 刷 図書印刷株式会社

製 本 図書印刷株式会社

© MIYUKI HOSINO 1983

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上
での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-147123-6 (児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送
りください。送料小社負担にておとりかえます。)

■この本についてのお問い合わせは、講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。



ルパン対ホームズ



モーリス＝ルブラン／作
保篠龍緒／訳 依光 隆／絵



講談社 青い鳥文庫

もくじ

第一章 茶色のかみをした女

第五一四号券……………5

おどろくべき方法……………12

怪盗紳士……………18

けむりのように……………28

ふしぎな犯罪……………35

青色のダイヤ……………43

犯人はだれ？……………52

ドゥレアル夫人の正体……………59

第二章 だいしやう やみと光と ひかり

ルパンとホームズ……………69

無人やしき……………79

にせ手紙……………86

三つのできごと……………96

技師デスタンジュ……………103

黒いかげ……………108

レストランの客……………116

ルルー兄弟……………121

第三章 だいしやう 怪船つばめ号 かいせんごう

怪美人……………129

第一章 茶色のかみをした女

第五一四号券

十二月はじめのある日のこと、ベルサイユ中学のジェルボア先生は、町のとある古道具屋で、ふと、みようなものを見つけた。ひきだしのたくさんついた古づくえだった。

「ああ、これはいい。むすめのシュザンヌに買ってやろう……。番頭さん、ここへとどけてくださいよ。」

ジェルボア先生は、番頭に住所を書きとらせ、金をはらって、表へ出た。

するとそこへ、一人の青年紳士がはいってきて、「これは、いくらかね？」とたずねたが、そのつくえが、すでに売れたものと聞くと、大いそぎで、ジェルボア先生のあとを、追いかけていった。

「もしもし。あの……こんなことを申して、まことにしつれいでございますけれども……ただいま、あなたが買いになったあのつくえ、ぜひほしいのですが、わたしにおゆずりくださるわけ



にはまいりませんでしょうか。」

「さあ、あれは……。」

と、ジェルボア先生は、ふりかえって答えた。

「おきのどくですが、わたしも氣にいつて、せつかく買ったものですから……。」

「いくらでお願いになったか知りませんが、いかがです、その倍額さしあげますが……。」

「いけません。」

「では、三倍では？」

「いけないといえは、いけないです！」

と、短気なジェルボア先生は、すこしはらをたてて、となりつけた。

「わたしは、もうけるために買ったのじゃありません。」

青年紳士は、だまっただまま、きつとジェルボア先生をにらんだ。その眼光のするど



さ！ ジェルボア先生はその目を、いつまでもわすれることができなかった。

家に帰って一時間ばかりすると、つくえがとどいてきた。シュザンヌは、すっかりよろこんで、やさしい父親の首にしがみついた。母親のない、このむじやきな美しい少女は、

いそいそと、このつくえを、じぶんのへやに運びこみ、ひきだしを一つ一つぬいて、ていねいにそうじしてから、用紙や手紙や、切手類や記念品や——それから、父親がいつもたいてせつにしている書類入れの小ばこをも、きちんとその中へしまいこんだ。

よくじつの午後、シュザンヌは、いつものように、父親を中学の鉄門のところ待ちうけ、親子つれだって、家に帰ってきた。

「どうだね、つくえは？」



「ええ。とてもりっぱよ。きょう、ばあやと二人で、いっしょうけんめいみがいたの。まるで、かがみのように、ぴかぴか光ってるわ。」

「そうか。そんなに気にいってよかったね。……どれ、ちよつと見せてもらうかな。」

「どうぞ。」

シュザンヌは、うれしそうに、先に立ってへやのドアをあけた。が、中へふみこんだたん、「あつ！」と、思わずおどろきのさけびをあげた。むりもない、けさまでたしかにあったつくえが、どうしたとか、かげも形もなくなっていたのだ。

「オルタンス、オルタンス！ おまえ、きょう家をあげたかい？」

「はい。あの……さつき、ちよつと……ほんのちよつと……市場へ買い物にいつてまいりましただけですけど……。」

ばあやのオルタンスは、うろたえながら走りだしていったが、近所の人に聞いてみると、ついきさきほど、金ボタンの服をきた、一人の男が、馬車でやってきて、二度ばかりよびりんをおしているようだったが、まもなく帰っていった、ということだった。

「しまった。そいつのしごとだ。」

ジェルボア先生は、じだんだふんでくやしがりながら、シュザンヌといっしょに、室内の品を、あれこれとしらべてみたが、ふしぎにも、つくえのほかには、なにひとつしなわれているもの

がない。とけいも、金貨をいれた金入れも、とだなの中の品も、見たところみなぶじだった。

「はて、ね？」と、ジェルボア先生は考えながら、ふと、きのう会った青年紳士の、あのしつこい申し入れと、それをことわられたときの、うらみのこもったあのするどい眼光を思いだし、それを、すぐやってきた警官に話したが、警官はただ、ふんふんといって聞いただけで、身をいれてとりあげもしなかった。

「おじさん、まあいいじゃないですか。たかが六十フランの古づくえ一つだけの災難ですんだんだから……。」

かけつけてきた、シュザンヌのいとこのフィリップが、そうだったので、それもそうだと思つたが、しかし、まずしいジェルボア先生は、せっかく買ったものをと、ざんねんでならなかった。ことによると、あのつくえは、ひきだしが二重底になつていて、その中に、たいへんな財産でもかくしてあつたのではないか、というようなことまで考えた。だが、どうしようもなかった。

こうして、二月ほどたったある日のことだった。めがねをかけて、その朝の新聞を読んでいたジェルボア先生は、ふと、つぎのような記事に目をとめた。

百万フランとみくじ、当選発表。当選番号は、第二十三回の第五一四号……。

「おや。」

ジェルボア先生は、ぶるぶるとふるえる手で、ポケットからとりだした小さな手帳を、いそがしくくりあけた。そこに書きとめておいた番号を、一字一字ていねいに読んでみると、番号はまさに、第二十三回第五一四号だ！ 思いもかけぬ百万フランという大金が、ころがりこんできたのだ。

ジェルボア先生の目はかすみ、心臓は、いまにもとまってしまいそうだった。むちゅうになつて、その公債のしまつてある小ばこをとり、書齋へ走つた。戸だなをあけた。ところが……ああ、なんと、いつもそこにあつたはずの、その小ばこがない！

「シュザンヌ、シュザンヌ！ はこ……はこをどうした？ ……ほら、おとうさんが、いつもここにおいた、あのルーブルの小ばこさ！ あれを、どこへやったか知らないか？ え？」

「ああ、あれ。あれならわたし、あの中へいっしょにしまつておいたわ。」

「ど、どこへ？ どこへしまつた？」

「ほら、あの……ぬすまれたつくえのひきだしの中よ。」

「な、なに？ あのつくえの中だつて？ じゃあ……じゃあ、あれも、いっしょにぬすまれてしまつたのか！ ……ああ、ああ、ああ！」

ジェルボア先生は、らくたんのあまり、くたくたと、くずおれて、その場へすわりこみ、子どものようになきだしてしまつた。

シュザンヌは、びっくりして聞いた。

「ね、おとうさん。いったいどうしたというの？ あのはこには、そんなにだいじなものはいつていたの？」

「だいじなもののどころの話じゃない。シュザンヌ、おとうさんはな、百万フランなくしてしまつたのだよ。百万フランを！」

「えっ、百万フラン？」

「そうなんだよ。せっかくまいこんできた幸運を……ああ、なんということだ！」

ジェルボア先生は、力なくつぶやいたが、たちまち、はじかれたようにとびあがると、足をドンドンとふみならしながら、

「なにくそ。これをむぎむぎとられてたまるものか。百万フランは、だれがなんといおうと、りっぱにおれのものだ。……ちくしょう！ きつと手にいれてみせるぞ。とらずにおくものか。」と、いかりをはきだすようにどなった。

そうして、あつけにとられているシュザンヌに、くるりと背をむけたジェルボア先生は、じぶんのつくえにむかうと、すぐにペンをとりあげて、つぎのような電報の文をつづった。

第二十三回第五一四号券の所有権は小生にある。小生いがいのなんびとにも、百万フランをわたさないでもらいたい。

ジェルボア

パリ銀行頭取どの

この電報がつくとほとんど同時に、パリ銀行へは、もう一つの、べつの電報がまいこんだ。それには、こう書いてあった。

第二十三回第五一四号公債は、小生のものである。したがって、百万フランをうけとる権利は小生のみにある。

パリ銀行頭取どの

おどろくべき方法

「あの公債は、たしかにわたしが、いまは死んでしまったベツシイ砲兵連隊長から、二十フランで買いつけたものなのです。けっしてまちがいありません。」
と、パリ銀行頭取の前で、ジェルボア先生はいきつた。

「そのしもうこがありますか。」

「ありますとも。連隊長の友人なら、だれでも知っています。また、連隊長からわたしによこした手紙もあつたのです。」

「その手紙を見せてください。」

アルセーヌ・ルパン



「さんねんながら、その手紙は、公債といっしよにぬすまれてしまいました。」

「それをぜひ、なんとかして見つけだして、見せていただきたいですね。せめて、それがなければ、どうにもなりません。」

が、これは、むりな話だ。さがせといったって、さがしようがない。それにしても、頭取がなせ、このように、その手紙を問題にするのか、ジェルボア先生はふしぎだったが、帰ってきて、その日の新聞を見て、はじめてすべてが、はっきりわかった。

新聞には、ルパンのことが、にぎやかに書きたててあった。それを見ると、ルパンは、あくまでもジェルボア氏とあらそうために、有名な弁護士ドチナン氏のところへ、じぶんが正当な権利者であることをしようこづけるための、いろいろな材料を送ったこと、そうして、「第五一四号のこの公債は、じぶんがベツシイ連隊長から買いとったもので、そのしようこには、このとおり連隊長の手紙を持っている。この手紙のあて名は、『したしき友』とだけしか書いてないが、この『したしき友』というのは、すなわちわがはいのことである。」と、そらうそぶいている、ということなどが、大きく書いてある。

「つくえをぬすんだのは、たしかにあいつだ。」

と、ジェルボア先生は、歯ざりしながら、くやしがり、さんねんがったが、それにしても、あいつはどうして、あんな安物の古づくえなどをぬすんだのだろうか？ まさかあの中に、公債証

書がはいっているとは知らなかつたろうし、かりに知っていたところで、それが、くじにあたるなどということが、わかるはずもなかつたろうに……と、ふしぎがったが、またたちまち、

「いやいや！ あいつはそれを、知っていたにちがいない。なにもかも知っていたにちがいない。あいつは、じつにおそろしい頭脳を持っている人間だ。先の先まで見ぬくことができる目を持った人間だ。まさかいかになんでも……などとは、およそそれを知らないもののいうことだ。かれはまったく、不可能ということを知らぬ怪物なのだから……。」

そう考えてジェルボア先生は、なにかしらきゆうに、からだじゆうが寒くなるのをおぼえた。

しかし、ジェルボア先生は、けつしてこの百万フランのゆめを、すてさろうとはしなかつた。毎日、その方法を考えこんでいると、ちょうどそれから十二日めの朝、親展と書いた一通の手紙が、その手もとにとどいた。うらをかえして見ると、「アルセーヌ・ルパン」とあつた。

——小生とあなたとのあらそいは、もういいかげん世間をおもしろがらせたことだから、このへんで、いちおう、きりあげることにして、ひとつ、まじめに相談したい。

はつきり申せば、あなたは、百万フランをうけとる権利はあるが、証券がなく、小生は、その権利はないが実物を持っている、というわけで、これはいくらにらみあつていても、どうにもならない。そこで相談であるが、どうですか、このさい、百万フランを二つにわけて、あなたが五十万フラン、小生が五十万フランということにしたら、これがいちばんさっぱりと、せ